

## ベトナム北部タイ族の集落構成と住居形態の研究 —タイ語系民族の集落と住居の研究1—

上 田 博 之

### Case 1: The Construction of Villages and the Formation of the Dwellings of the Thai in Vietnam —Study on the Villages and the Dwellings of the Daic—. Hiroyuki UEDA

The Daic comprise the majority of the Asian races living in the 6 countries of Thailand, Laos, Myanmar, Vietnam, India and China in the area situated between latitude 7° to 26°N and longitude 94° to 110°E. The Daic were once viewed as the origin of the Japanese because of the former's close affinity with the cultural complex of broad-leaved evergreen forest. Therefore, this has attracted scientific study has not yet been conducted. The aim of the present study way to examine Daic life culture through detailed analysis of their physical environment, such as villages and dwellings, with special reference to both Black Thai and White Thai. Although the Thai live in an area that has undergone many changes as a result of French colonial administration, the Vietnam War with America, and recent remarkable economic development, they have inherited their own tradition not only in their way of life, but also in their village landscape and dwelling form. This study clarified the physical and spiritual aspects of the construction of villages and dwellings among the Black Thai and White Thai, based on field research carried out in 1993 and 1994. It is also a monographic description of how they have maintained their traditional life in its physical and spiritual aspects. This study shows that the Thai of Vietnam have an obviously different life culture from that of the Daic living mainly in Thailand, as so far as is known. The way of life of the Daic is also partly examined.

**Key words:** Vietnam, Thai, living behavior, living space

### はじめに

タイ・カダイ語族に属するタイ系諸言語民族(以下、タイ語系民族とする)は、タイ語群(南方タイ語)、チワン語群(北方タイ語)、カム・スイ語群(亜タイ語)に分類される(図1)。これらのタイ語系民族は、北緯7度～26度、東経94度～110度にわたる地域で、タイ、ラオス、ミャンマー、ベトナム、インド、中国の6ヶ国にまたがり居住する(図2)。

タイ語系民族はアジアの照葉樹林帯で生活し、中国雲南省を起源とするものと考えられる民族である。我々日本民族との深い関係を指摘され(注1)、その生活は科学者の関心をひいた。しかし、タイ語系民族の居住地域における自然条件・地理的条件や政治的不安定などが調査研究を阻んできたために、生活は未だ総合的に解明されていない。一方、近代化や居住する地域の主要(多数を

占める)民族化は、少数民族固有の生活を維持することを難しくしている。上記の背景をくんで、緊急な調査・記録を行うことは、彼らの伝統的な生活(注2)の復元に不可欠な作業である。本稿で述べるベトナムのタイ族の記録は非常に少なく、特にベトナム戦争以降の調査研究は少ない状況にある。本研究は、少数民族の生活と物的生活環境について記録、分析し、未解明の部分明らかにするために、(1)伝統的集落構成原理の解明、(2)公・私的空間構成と各種生活、居住者の協同性の様態の対応関係の解明を目的とした基礎研究である。

タイ族の社会は植民地政権時代にも伝統的な社会関係が維持されてきている。この民族の文化の解明は、タイ語系民族文化の解明のみでなく、ベトナムの少数民族文化の解明に寄与するものであると考えられる。

なお本論文はUeda(1995)、上田博之(1994、1995a、1995b)に新たな知見を加え、修正加筆したものである。

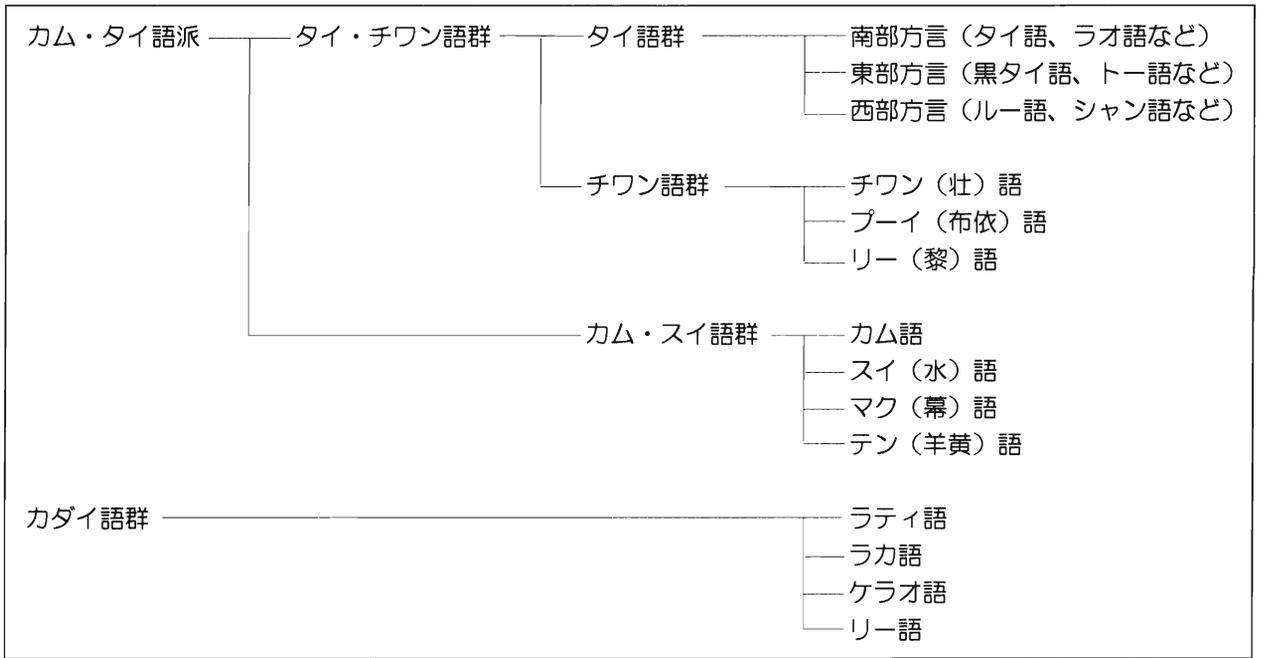


図1. タイ・カダイ語族の分類.

石川栄吉ほか編(1987)の記述をもとに著者が作成した.

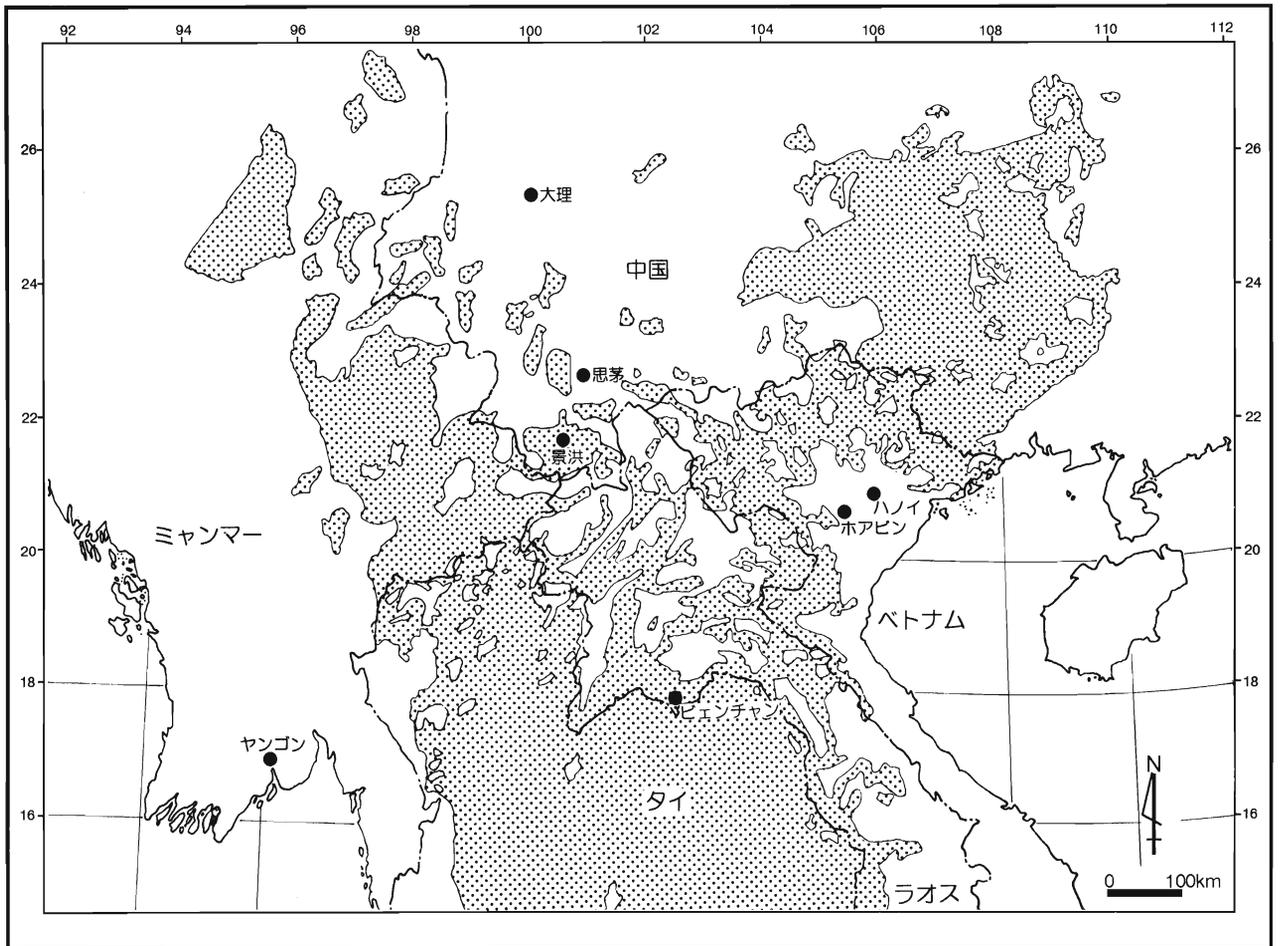


図2. タイ語系民族の居住地分布.

## ベトナム研究の現状

ベトナムの諸民族に関する調査研究はきわめて少ない。とくに少数民族に関する書籍や文献のみでなく、ベトナムに関するものの寡少さは、「安南の書籍の数は非常に少なく、帝国の図書館ではそれら書籍の保管は無視された。」という表現すら18世紀にうまれている(注3)。また、こうした書籍の数が少ない最大の理由は、この国がしばしば外国の植民地、戦争・侵略の継続、書籍・原稿の収集と保存が難しかったことや、印刷技術の未発達、書物が権力者と一部の知識人の専有物であったこと、湿気・洪水などと深く関わっている(菊池, 1966)。しかし、フランス植民地時代にはフランスの人文地理学的な研究が盛んにおこなわれていた。安南の共同体(P. Ory, 1894)、農業・農民(J. Borie, 1906; P. Gourou, 1936)、1960年頃の政治地理(G. Maspero, 1925)などに関する研究は、時代を反映した研究として相応の成果を上げている。少数民族について行われた研究には、タイ族、モン族など(E. L. de Lajoinquiere, 1906)、タイ族、モン族、ロコ族、ト一族(E. Diguët, 1908)がある。白タイ族の住居(M. Abadie, 1924)なども、当時の少数民族の生活を知る数少ない資料となっている。しかし、これらの調査研究は綿密かつ詳細な調査の欠如が指摘でき、明らかに誤りと思われる記述も少なくない。

ベトナム戦争以降の調査研究もきわめて少ないが、少数民族を一括した F. M. Leber *et al.* (1964) は、東南アジアの民族を分類したのとして現在でも少数民族の分布・分類を知るうえで貴重な資料となっている(注4)。Nguyen Trac Di (1970) はベトナムのすべての少数民族についてその起源から風俗までとりまとめたものであるが、「少数民族の風俗および習慣については多くの著者が言及しているが、今日まで十分に、また忠実に、これを反映している著書はほとんど見あたらない。」と指摘するほど体系的にまとめたものは従来なかった。最近ではベトナム人による研究も進み、ベトナムのすべての少数民族について記録した Dang Nghiem Van *et al.* (1984) が挙げられるにすぎない。しかし、本研究のように少数民族の住居・集落とといった物的環境の分析を通して少数民族の生活視座に据えた調査研究は未だ行われていないのが現状である。

## ベトナムのタイ語系民族の概要

## ベトナムの近況と少数民族の状況

ここ数年、ベトナムは1986年から行ってきたドイモイ(刷新)と言われる経済開放政策の成功、1994年のアメリカによる経済制裁の解除、1995年7月ASEAN加盟などにより経済活動が活発化し著しい発展をとげた。ハノイ、

ホーチミンシティ、ハイフォンといった大都市のみならず、あらゆる地域で近代化や開発がめざましい速度で行われている。また、一方ではアジアの有数な穀倉地帯として期待されている農村の近代化も著しい。

このような背景の下、自然環境の破壊や、少数民族も近代化・ベト族化とも言うべき主要民族化により民族固有の伝統性・地域性を生かした生活文化の変化・崩壊が見られ、その集落形態、住居形式の変化など、開発の陰で喪失しつつあるものが多いのが現状である。

ベトナム政府もこのような急激な経済発展に対し、共産主義の持続に不安を持つかのように、1996年2月には看板などに外国語を使用することに制限を加え、ドイモイは単に経済刷新を意味するものではなく、「精神の刷新」を意味していると発表し、国民が経済発展に舞い上がっていることをいましめている。

ベトナムはいろいろな民族で構成される複合国家である。1935年3月インドシナ共産党第一回大会において、初めて少数民族問題に関する決議が採択され、植民地支配下における民族解放運動という立場から行われた調査研究は、民族社会の経済・政治・社会条件の特殊性を分

表1. ベトナムの民族別人口。

1989年4月1日付、ベトナム統計総局資料より作成。

オーストロアジア語族	ベトナム語グループ	キン(ベト)族 ムオン族 ト一族 チュット族	Kinh (Viet) Muong Tho Chut	55,900,000 915,000 51,000 2,400	
オーストロアジア語族	モン・クメール語グループ	クメール族	Khmer(Khhome)	895,000	
		バノ族	Bana	137,000	
		セダン族	Sedang(Xu-Dang)	97,000	
		コホ族	Kohor(Co-Ho)	92,000	
		フレ族	Hre	94,000	
		ムノ族	M'ngong	67,000	
		ステイエン族	Stieng(Xtieng)	50,000	
		ブル族	Bru	40,000	
		コム族	Kho Mu	43,000	
		コトク族	Co Tu	37,000	
		タオイ族	Ta Oi	26,000	
		マ族	Ma	25,000	
		コ族	Co	23,000	
		ジェ・トリエン族	Gie Trieng	27,000	
		シンムン族	Sinh Mun(Xinh Mun)	11,000	
		チョロ族	Cho Ro	15,000	
		マン族	Mang	2,200	
		カン族	Khang	3,900	
		ロママ族	R'Mam	200	
ブラウ族	B'Rau	200			
オズ族	O Du	0			
モン・ザオ語グループ	モン族	H'Mong(Meo)	558,000		
	ザオ(マン)族	Dao(Man)	474,000		
	パテン族	Pathen	3,700		
タイ語グループ	タイ族	Tay	1,190,000		
	タイ族	Thai	1,040,000		
	ヌン族	Nung	706,000		
	サンチャイ族	San Chay	114,000		
	ガイ族	Gay	38,000		
	ラオ族	Lao	9,600		
	ル族	Lu	3,700		
	ボイ族	Boy	1,400		
混成語	ラチ族	La Chi	8,000		
	ラハ族	La Ha	1,400		
	コラオ族	Co Lao	1,500		
	プペオ族	Pu Peo	400		
	ジャウライ族	Gia Lai	242,000		
オーストロネシア語族	エデ族	Edeh	195,000		
	チャム族	Cham	99,000		
	ラグラ族	Ra-Grai	72,000		
	チュル族	Chu Ru	11,000		
	ホア族	Hoa	900,000		
シナ・チベット語族	シナ語グループ	サンジウ族	San Ziu(San-Diu)	95,000	
		ガイ族	Ngai	1,200	
		ハニ族	Ha Nih	13,000	
	チベット・ビルマ語族	フラ族	Phu La	6,400	
		ラフ族	La Phu	5,300	
		ロ族	Lo Lo	3,000	
		コン族	Coo Ng(Cong)	1,300	
		シラ族	Si La	600	

単位(人)

析し、少数民族を3つのグループに類型化し(注5)、54種族の少数民族に分類した。この分類は言語学上や民族学上での分類とは微妙に異り、実際の民族数は確定されていない(注6)。現在はこの54種族のうち、主たる民族のベト(キン)族は人口の87%を占めており、残りの13%を53種族が構成している(表1)、この比率は1967年時点でベト族が85-88%占めていたという記載(Chaliand, 1969)と比べて、あまり変化していない。大多数を占めるベト(キン)族は都市部を中心とした平地部に住み、その他の大多数の少数民族は、山間部に住むという棲み分けが、民族間闘争による力関係や長い歴史の中で行われている。また、山間部の少数民族の間においても、生業として平地で水田耕作を営む比較的人口の多い民族と、山地で焼畑農業、陸稲(オカボ)栽培を行う小人数の民族に分けられていて、民族間の力関係による棲み分けも行われているといえる。これらは特に北部で著しく、少数民族の中でも人口の多い民族と少ない民族の関係が顕著である。

自然と密着した暮らしを営み、農業を中心とした生活を行ってきた少数民族と、農作物以外の生活用品を生産し、物流をおこなっているベト(キン)族のあいだにも、生業上の棲み分けが展開されている。

しかし、これらベトナムの少数民族の生活や集落・住居は、固有性をよく残しており、その集住形態とともに注目すべき点が多いにもかかわらず、その実態は明らか

にされていない。

### タイ族の特徴

綾部はタイ語系民族について「インドシナ半島を中心に居住する諸民族の中で最も人口が多く、かつ地理的にも最も広汎な分布をみせている民族のひとつである。したがってその内容も複雑多岐にわたっており、多くの部族ないしは種族に分けて考察する必要がある。種族間の違いは・・・素人眼にも容易に判別しうる程度に差がみられる場合もあるが、語調や容貌あるいは服装のみからは必ずしも見当をつけえないほど相互に錯綜していることもある。」と述べている(綾部, 1971)。本研究で扱うタイ(Thai)族は、HRAF(人間関係領域ファイル)の分類によると、タイ・ガダイ語系の6分類において中央高地グループとして、他のタイ系民族と別のグループとして扱われている(図3)。ベトナムのタイ語系民族は、北部で居住しており、人口310万人、全人口の4.8%、少数民族の37%(表1)を占め、少数民族の中では、多数をしめる民族である。なかでもタイ族は人口104万人、タイ語系民族の34%を占めている。

綾部(1971)によると、伝統的意味でのタイ族とは、一般に、(1)タイ語を話し、(2)仏教を信じ、(3)一般に姓をもたない、(4)低地渓谷移動の稲作農耕民で、(5)封建土侯の統治形態をもつ人々の集団である。また、伝統的には杭上住宅に住む特色をもっているという物質文化上の特徴

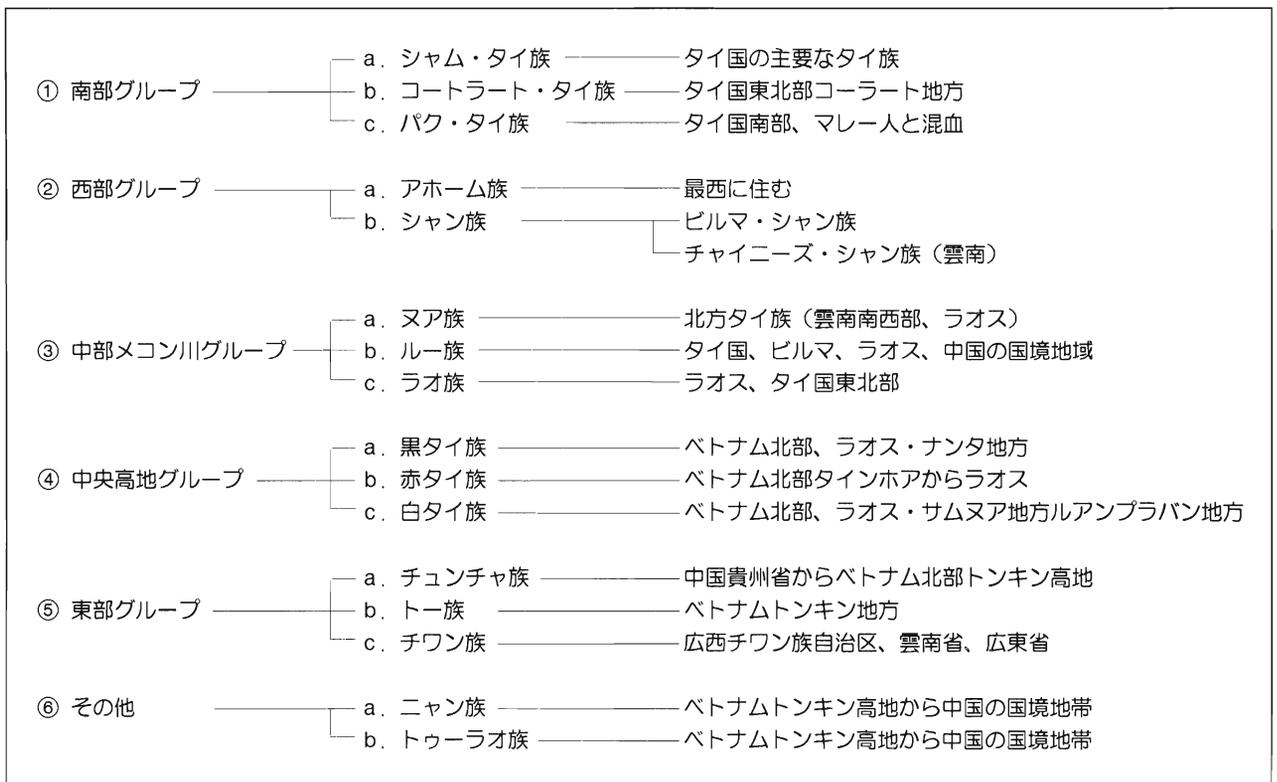


図3. タイ語系民族の分類。

HRAF(人間関係領域ファイル)による分類をもとに著者が作成。

も指摘した。しかし、ベトナムのタイ族は現在、姓を有していること、もともとベトナムのタイ族は仏教よりアニミズムを信仰していたと考えられることや、ベトナムのタイ族は地理的条件もあるがかならずしも低地生活をしていないことなど、一般的なタイ族の伝統的特徴と異なった特徴を有している。このことからタイ語系民族の生活を知るうえでも、タイ族の個別的な研究が重要であると考えられる。

このタイ族はその生活する地域差、言語・服装などの差異から白タイ、赤タイ、黒タイに分けられている(写真1)。

このタイ族の居住する地域(図4)であるベトナムの北部の西北(タイバク)地方は、高原・山地・盆地・河岸台地からなっており、山地の平均高度1000mである。中国雲南から東南に流れる紅河を中心に北東のバクソン山脈、西側のラオスとの国境をつくるタイバク山脈、タイバク山脈が南に延びてラオス、カンボジアとの国境となるチュオンソン山脈が連なる。ダー河がタイバク山脈を貫流する形で中国雲南中央部から流れる。これらの山脈には3000m、2000m級の高山がいくつかある。また、ダー河の西のソンラ高原は長さ200km幅15-25kmにおよぶ。紅河はその河口部分で15000km<sup>2</sup>におよぶデルタを形成

している。北部地域の中で山地地域の盆地空間が農業気象空間は、周囲の取水域に恵まれるために盆地空間での小規模灌漑はきわめて発達していて、農業生産が安定している最優良地である(桜井, 1987)。

また、ベトナムのタイ族は他の諸民族が植民地化されたにもかかわらず、1950年代末の土地改革・民主改革が施行されるまで植民地化以前のフィアタオ(phia tao)と呼ばれる首長制が維持されていた。

## 調査の概要

本研究は、1993年8月21日～9月1日(注7, 以下, 第一回調査と呼ぶ)および1994年7月7日～7月21日(注8, 以下, 第二回調査と呼ぶ)に行った補足調査に基づくものである。

本稿で述べるタイ族の集落は、ハノイの西北に位置するホアビン省のマイチャウ(Mai Chau)のラックタイ(Lac Thai)村の白タイ族集落、およびハノイ西北部ソンラ(Son La)省のアイ(Ai)村の黒タイ族集落の2集落である(図4)。

調査項目は、(1)集落の測定、住居の平・断・立面の実測と家財の寸法とその配置の実測など。(2)家族構成・住まい方などのヒアリング・観察。(3)社会組織、共同行事、農事などについてヒアリングと直接観察などである。

調査対象集落の選定には、居住地域を車で視察し、いくつかの集落について住居・集落の実測、その形態、近代化の度合い、伝統的生活等の持続度などのヒアリングによる広域調査を行った後、伝統性をよく残し、典型的であると思われる集落を選定して狭域調査を行った。白タイ族の場合には、視察は3日間行い、約50集落の視察、6集落の広域調査を行った後に調査対象地を選定した。黒タイ族の場合には5日間で70集落の視察、8集落の広域調査を通して調査地の選定をした。

本研究は、白タイ族、黒タイ族を総括するものではないが、単に特定のある集落の単なる事例研究にとどまらず、典型的な事例の研究であると言える。

## 白タイ族の集落・住居

### 白タイ族の居住地域と生活

白タイ族は、ハノイの近郊の農村部から北部の中央部分に居住する。今回の調査対象地である、ホアビン(Hoa Bin)省マイチャウ(Mai Chau, タイ語では Muong Mun)はハノイより西南にのびる国道6号線のハノイから100km程離れたところであり、タイ族が集中して居住する地域の東南端にあたる。この地域はハノイから100km程しか離れていないにもかかわらず、険峻な山々が都市・平野部との交渉を難しくした。国道6号

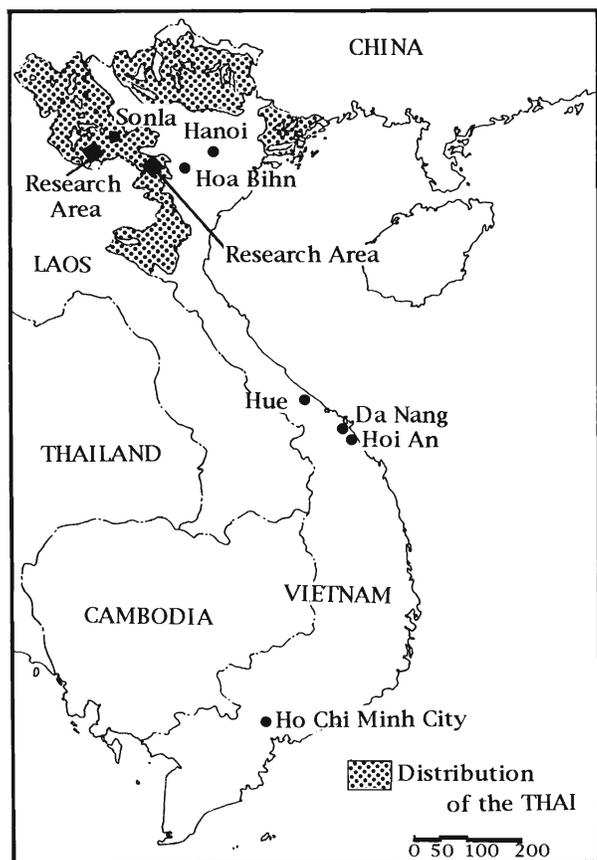


図4. タイ族の居住地域と調査地。

Carte Ethnographique du Vietnam, LamTamをもとに

線はアメリカとの戦争中につくられた。この地域の白タイ族が交渉をもったのはダー川を遡った西北(タイバック)地方やマー川を遡ったラオスの山地であり、現在でもとくにラオスの山地とは交流があり、その地域に自分たちと同じ民族が生活しているとの認識をもっている。このような自然・地理条件がマイチャウのタイ族の文化・社会の独自性の保持に深くかかわった要因であったと考えられる。この地域で伝統的生活を営む白タイ族の300を越える高床式の茅葺き民家が谷間に並ぶ光景はみごとである。

生業は、水稻農業が中心である。15年くらい前までこの地域では一期一毛作であったという長老の言はあるが、現在は陰暦の10月に播種、1月に移植、5月に収穫する夏稲と、陰暦の4月播種、6月初旬移植、9月収穫の雨期種(秋稲)の二期作を行っている。フランス植民地時代は夏稲を5月稲、秋稲を10月稲と呼んだと言う記録がある。品種としてはベトナム農業技術研究所所長のトゥアン(Dao The Tuan)氏によれば夏稲をベトナム古来の伝統品種、秋稲は外来的なものでベンガル系のものであったとしているが、現在は夏稲はジャポニカ類似種であり、秋稲はIR種・中国系改良品種が多くなっている(桜井, 1987)。この米作以外に、漁業(タイ族は河川に隣接した所に居住している。現在はため池などによる養魚も盛

んである。) 畜産、家禽、山での狩猟、採集により、副収入を得ている。

ベトナムのタイ族は、1950年代末の山岳地帯の少数民族居住地帯において行われた土地改革・民主改革まで首長制(フィアタオ: phia tao)をとっている。これは首長制が植民地時代に解体させられ、植民地経済の中心都市・平野部と同質化し、地主制へと移行していったベトナムの他の少数民族と比べても特殊である。マイチャウのフィアタオ制について述べた記録(「ムオン規則」)が

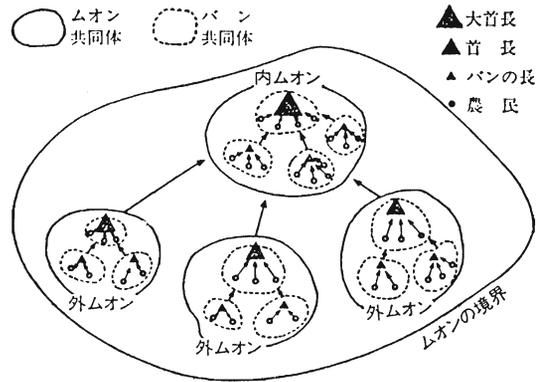


図5. ムオンの構成図。  
吉沢(1982b)より引用。

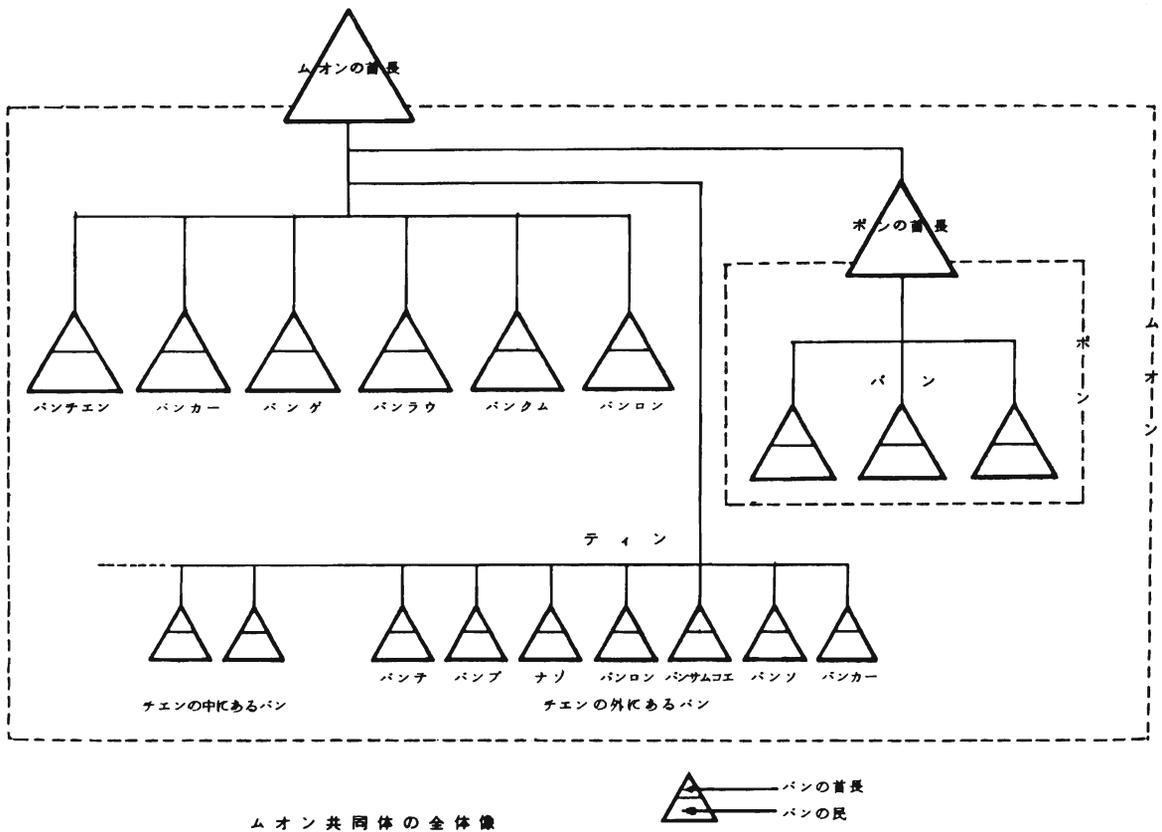


図6. マイチャウの「ムオン規則」にあるムオンの構成。  
吉沢(1982a)より引用。

残っており、制度およびマイチャウの村落の概要を知ることができる。吉沢(1982a, 1982b)により明らかにされた「ムオン規則」をまとめてみると以下ようになる。

1. ムオン(Muong: 村落)は一人の首長(tao)によって統轄されている領域全体を指す。このムオンの境界は中央権力や植民地政権によって承認・保証されていた。その領域としてのムオンの中に複数の村落共同体(これもまたムオンといわれる)があり、その中で最も有力な大首長が居住し、他のムオンを統轄する最大のムオン共同体を内ムオンという(ムオンの住人からはチエンChiengと呼ばれ、ムオンの首府的扱いである)。その下に統轄され、それぞれ一人の首長を頂いているより小さなムオンを外ムオン(pong)という。さらに各ムオン共同体は複数のバンと称する部落によって形成され、このバンは小は3戸、大は100戸以上、通常は10~30戸の異なる血縁の家族が居住している(図5)。

マイチャウのあるムオンの場合、首長に直属している、ムオンのバンは6つとティン(thin: 後述するクオンの村落)のバンは7つ、さらに3つのバンのある1つのポン(pong: 小村落)からなっている(図6)。

2. この大首長と首長は貴族身分であり、フィアタオと呼んだ。フィアタオはその身分と土地を所有する事ができた。村落にはフィアタオのほか「公田」(村落共有地)の分配を受けて水田耕作をする農民(共同体の公事や祭祀に参加できる)と「公田」を耕作するが共同体の公事や祭祀に参加できず、フィアタオでの賦役労働のために労働力としてフィアタオに分配された農民(パイとクオンと呼ばれる)、フィアタオの家に住み込んで家事などを行うコンフォン(家内奴隷: サー人という先住民族がなった)が住んでいる。クオンはクオンだけのバンに居住していた。村落構造と首長の体系が重層的であるのと同様に、ムオンの住人も、2重3重の重層的な性格をもち、貢納・賦役関係も2重3重になっていた。

3. 田は大きく分けて、グオット田(首長田)とナビーチャウ(主のある田: これは公田であるが、どこかの家に完全な使用権があり帰属している。)があり、この土地は基本的に共同体に属している。1959年8月の土地改革までこの状態は続いていた。フランスは1930年代にタイ(Tay)族、ヌン(Nung)族などには地主的土地所有をさせたのとは対照的にタイ族に関しては、私的所有の欠如状態を補強し、固定化するという2重の政策をとってきた。

### 集落形態について

ラックタイ村は山間に水田、河に囲まれる形で集落がある。実際には集落域はあまり明確ではないが4km×3km程度と広い。集落域に大きく二つに集中した居住地がある。水田は灌漑施設が完備し、居住地にも水路がめ

ぐらされている(図7, 図8, 写真2, 写真3, 写真4)。

集落は86の世帯(2氏族)からなっており、生産合作社

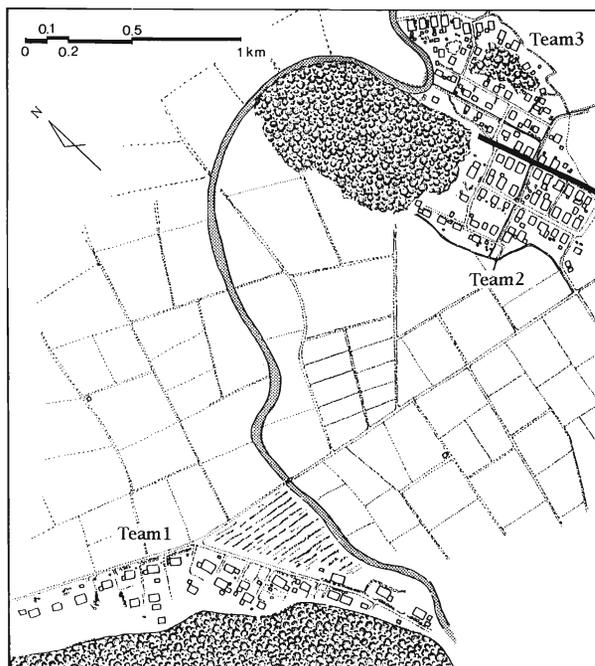


図7. Lac村集落図。

旧集落部とスプロールした部分がTeam2, 3, その後さらに集落が拡大した部分が、Team1の部分である。

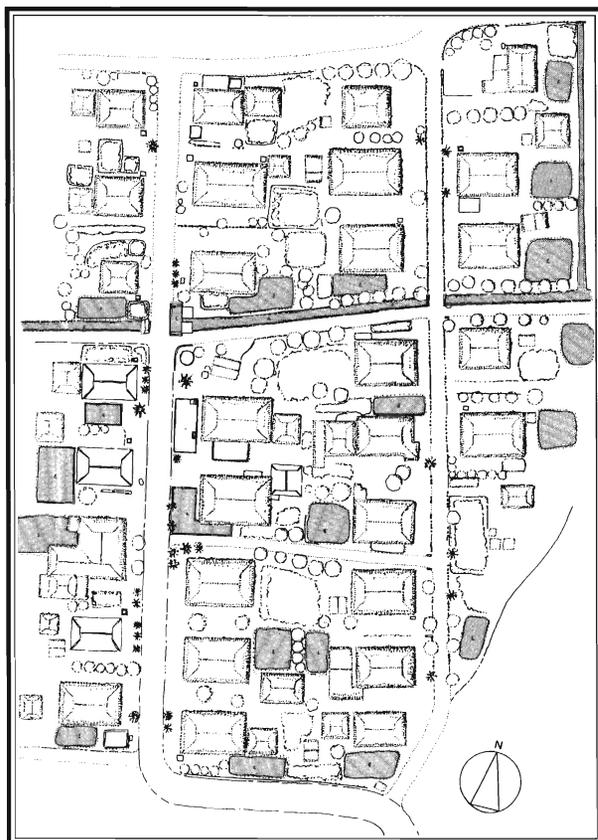


図8. Lac村集落中心部。

旧集落・現在のTeam2とTeam3の一部。

のチームを単位(ドイ: Doiと呼ばれる)として3つのチーム(3チームはそれぞれ25戸, 31戸, 30戸)に分けられており, 同一氏族ごとに住み分けている。この集落は, 1945年以前は21戸(2氏族)の集落であったが, このラック村は広大な土地を有しているため, 居住地の拡大は容易になり, 現在も拡大は続いている。この当初の21戸が「ムオン規則」にあるバンにあたると思われる。

集落の拡大は2段階を経て起こった。第一段階は戦後, 農地の人頭割り分配への移行にともない, 大家族制から分家する事で核家族化が進み, 約2倍になった。第2段階は新住民の移転によるものである。これについてはどのような経緯で移転してきたのか定かではなく, 現在も, 村民として扱われていない住民もいる。また, このニューカマーは耕作地をもっていないものが多く, 集落内を流れる河川での漁業権を取得し細々と漁業を営んでいる。彼らは新住民という表現をとっているが, その大半はコンフォンなどの家内奴隷すなわち先住民民族であった可能性が高い。田の分配においても, ナピーチャウはパイとクオンにだけ分配され再分配や換地は, 戸主が共同体の構成員でなくなったり, 土地を出ていく時に行われた程度であって, 実際には土地改良後もきっちりと行われていない可能性が高いことが, これら土地を持たない貧民が存在することからもわかる。

居住地の拡大も2段階を経ている。まず元の21戸を中心に拡大し, その後, 集落のエッジ(周縁)となる山地の麓に道路に沿って拡大している。第1段階までの拡大でできた集落は, 現在もほぼすべてが高床式藁葺き住宅で, 棟の方向が同一方向を向いており(西から南に20度程度ふっている。写真5), きれいなグリッド上の道路に面して並んでいる(写真6, 写真7)。これは, 山からの風を避ける配置となっているということである。各住宅は全面に立つ住戸とずれながら建てられており, 玄関が対面することがないように配されている。この配置は以前住宅の大きさが支配関係を表していたことから, 住宅の大きさを比べにくいようにとの配慮がなされているとのことであり, 現在住宅の新築において最も注意している事柄であるということである。

集落の入り口は3箇所あるが現在は門のような物はなく, かつてあったことを記憶するものもない。ただし, 旧集落は蛇行する河川に囲まれる形になっており, その川をわたる橋が集落の入り口を強く意識させる。この橋の周辺に生えているかなり大きな竹の群落, 洗い場(調理, 洗濯, 水浴用)は意識的につくられた空間であることがわかる。また, この旧集落中心部分には10数年前までコミュニティハウス(宗教色が強く寺院という表現がされるが, 仏教ではない。)があった。現在は建替えられ村長の弟の住居になっている。現在仏教を信じるものはほとんどいないが, 先祖崇拜は根づよく, どの家にもりっ

ぱな神棚(先祖は神である)がまつられている。また, 集会施設はこのコミュニティハウスがなくなってから, 生産合作社の各チームのチーフの家を利用している。村単位での集会の場合, 村長の家は利用されず, コミュニルハウスのあった場所の住宅に集まる。家が広く, 村で便利な場所にあるからという説明であったが, 住宅自体の広さは他の家と変わらない。またとりたてて便利な場所にあるということもないが, 元の習慣を踏襲しているためと思われる。

明らかにこの旧コミュニティハウスのあったところが現在も村の中心であり, 道幅も広く, その周辺に共同の浴場(写真8), 共同井戸(写真9), 近くに幼稚園, 稲干し場がある。

墓地は旧集落の背後にある山にあり, 死後1年間小屋にまつられた後(死者が50歳以上の場合, 5日間住宅でまつられたのちこの小屋に埋葬される。), 墓地替えが行われ, 土葬される。

山地の麓に道路に沿って拡大した新興地には, 共同井戸, 共同浴場があるが, 旧集落中心部のものより簡素である。住宅も旧集落中心部に比べ小さく, 材料も悪く, 住宅の配置に規則性が見られないことや以前は高床式でない住宅をつくっていたこともあるなどタイ族でない可能性が高いことがわかる。

ラック村は農業を主とした集落運営機構, 生産合作社を持ち, 生産合作社のチーフが必ず次の村長になる。村長は選挙で選ばれるというが, この慣習と矛盾する。また, 以前のバンの首長の力も依然強く, 村長はこの首長, もしくは親族などの旧貴族であると思われる。

生産合作社の主な役割は, 収穫物の管理と村共同所有となっている耕地の管理である。土地の肥沃さに応じてランクづけられた土地を, すべて(赤ん坊から高齢者まですべて)の住民に平等に分配される(彼らは平等であることを主張するが, 貢納量が一人当たりで決められており, 歴史的に見ても決して平等であることより, 多くの貢納を得る手段であると思われる。)のであるが, この耕地の分配がもっとも大きな仕事である。このような換地は毎年行われ, 大規模な地替えも数年に一度行われるということであるが, 前述のように大規模な換地はほとんど行われず, 若干の調整が毎年行われているにすぎないようである。また, 共同で所有する池での養魚, 河川での大規模な梁漁などの漁業の管理も大きな仕事である。

集落の大きな年中行事に, テト(旧正月)と収穫祭がある。ブタを殺し, 盛大に行われる収穫祭は米の収穫を祝うために, 以前はコミュニティハウスで5日間にわたり, 村全体で盛大に行われていた。現在は各自宅で, 親族, 近隣のものなど互いに人を呼んで行なわれる。この収穫祭の日にはTa Deoと呼ばれる竹をざる網状に編んだものをつくり, 村の入り口に付け, 部外者の立ち入りが禁

止される。

また、陰暦12月には5頭の牛を殺し、5日間の祭りが行われる。8月に行われる先祖が村を守るための祭りには、2年毎にブタ、3年毎に牛を殺して先祖にまつられる。これらの行事はすべて、村長が日取りを決め、占い師がその行程をとり仕切る。

約80%の結婚式は陰暦11月に行われ、ついで2月に多い。これは二期作の稲作の農閑期にあたるからである。近隣の村から嫁を迎える事もあるが、タイ族以外との結婚はない。婚姻後も嫁の姓が変わらないようである。

## 住宅について

旧集落部の各住居の敷地は道路に面し短冊状にあり、道路に面した部分には、建築用材になる樹木、パームツリーなどの樹木が植えられる。食用の淡水魚を飼うための池がある。住宅の後方には、バナナなど果樹や野菜が植えられる菜園がある(図9, 写真10)。

住宅は2m程度の床高の高床式住宅であり、主体構造は木造、藁葺き屋根である(図10, 図11, 図12)。前述した「ムオン規則」による住宅についての記載よれば、家とそれを取り囲む垣根には身分の上下によって様式が定められていた。特に垣根についてはムオンとポンの首長の住宅には様式の規定があった。ムオンの首長のための垣根は「ファタムルオン(hua tam luong)様式」で6肘の高さで5つの鹿の角を飾り付け、二重の戸を持っているのに対し、ポンの首長のための垣根は「ファタムトゥオン(hua tam tuong)様式」で同様に5肘の高さ3つの鹿の角を飾り付け、戸は二重にしない。また、住宅には台所、階段、囲炉裏があったことがわかるが、身分の差・様式についての記載はない。住宅の規模は、こぶしの大

きさが単位となる柱の太さによって示された。小さな家であろうと、4本以上の柱をもつ高床式の家には貢納の義務が生じていることから、コンフォンなどの家内奴隷や貧民層は高床式住居をもてなかった。しかし、現在は垣根はなく、住宅の大小、建築材料以外に身分差を感じとるものは何もない。

住居は居室空間である主屋とトイレ・調理場の付属屋で構成されている。間口8m前後、奥行12m前後の主屋は居住空間が完全には分化されておらず、簡単なついでにより分けられてはいるが、一室空間である。この居室は4つのスパン(4スパンのものが多いが、小さいものは3スパン、大きいものは5スパンである。)があり、空間は意識的に分離されている。入り口から第1のスパンは接客空間であり(昔はここにも囲炉裏があった。)、第2スパンは神棚を配した家の中心であり、当主はこのスパンで就寝する。第3スパンは囲炉裏をもち、第4スパンは簡単なついでにより分節され、寝室、衣服・食料置き場となる(図13, 写真11, 写真12, 写真13, 写真14)。

主屋の柱、梁には、魚の尾が張り付けられている。これは当主が育てた魚で、先祖に供えられたものである。この尾の数、大きさは当主の男性としての有能さを示すものである。

このような高床式住宅で平均4人(最大6人程度)2世代が生活する。子供は婚姻と同時に住宅を建設し独立する。

しかし、ラック村の観光化(これはドイモイによる影響であると考えられる。)は、藁葺き屋根をかわら葺き屋根に変え、主屋にあった囲炉裏をなくし、付属屋に移した。個々の住宅で簡易シャワーを備えるなど、近代化・ベトナム化も激しい。第一回調査と第二回調査の1年間にかかわら屋根住宅が増え、住宅内から囲炉裏がなくなった家もいくつか見られた。送電されていなかった村に、テレビ・扇風機・冷蔵庫などの電化製品を保有する裕福な家族が出現した。

住宅の建設は、当主の小指を基準としたモジュールをもち(上記したように拳を基準にしていたはずであるが、現在はこの小指を基準としているようである。写真15)、当主が交替するとモジュールも新当主のものが基準となる。建設は、旧暦の1, 4, 7, 10月をさけた月の、1日, 2日, 4日(たまに12日のこともある。)に行われるが、村の占い師のアドバイスをうけ、近隣関係を考慮して、当主が日程を調整する。家族が、建築材料を別な場所で部材寸法にカットする。建築初日と最終日は8人程度の村民の手をかり、あとは家族で建設する。他の村の親戚、大工が建設することはほとんどない。16日程度で主体構造の工事は終わる。修理はほぼ毎年行われるが、だいたい10年で屋根の葺き替えがなされ、20年くらいで新築される。

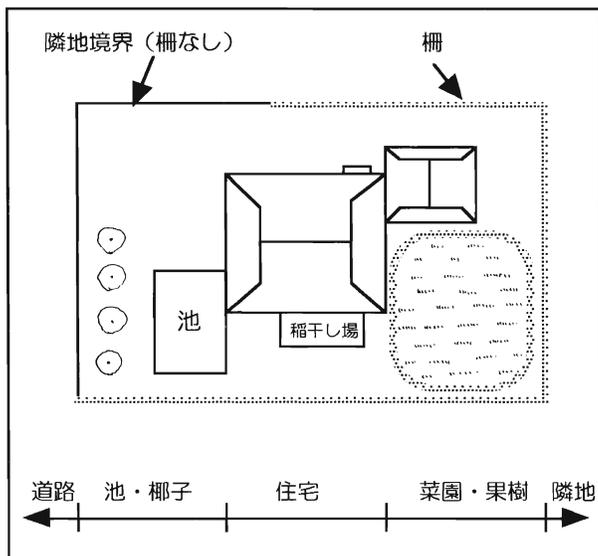


図9. 敷地内土地利用模式図。

敷地内の住宅、池、菜園、稲干し場などの配置は、どの住宅も同じで、このように模式化できる。

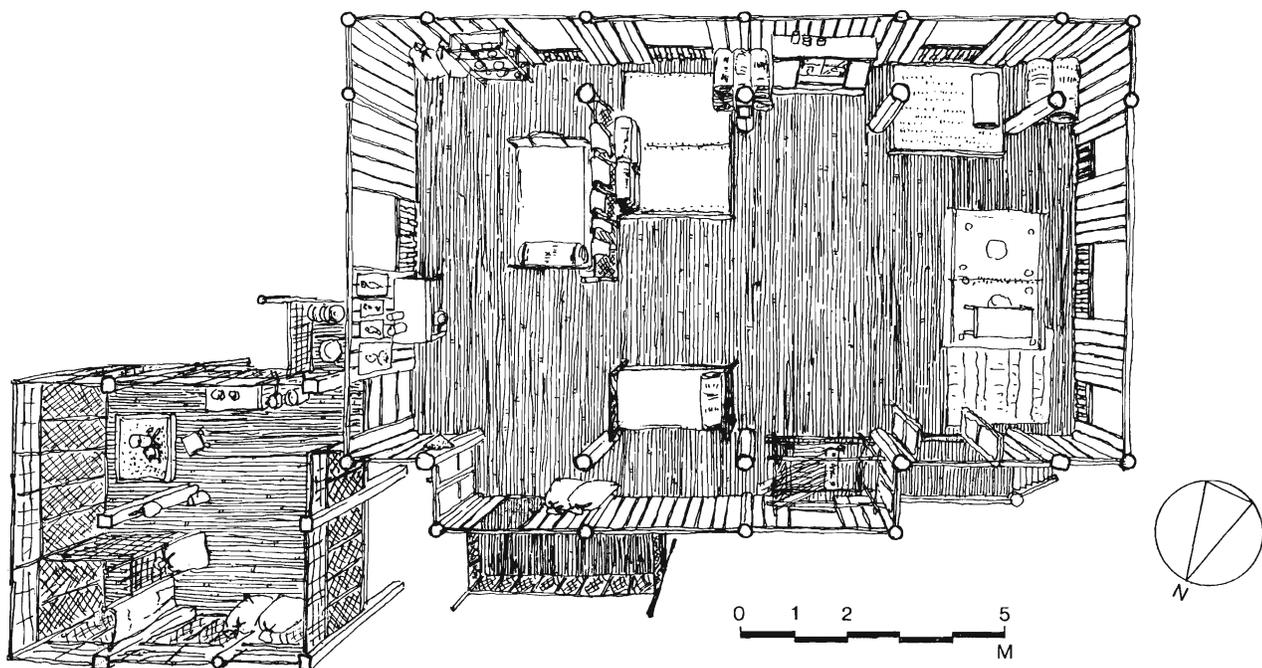


図10. 住宅平面図. Lac村, Ha Cong Nham(前村長)邸, 夫68才, 妻68才+孫(女20, 男18).  
住宅は, 2棟よりなっている. 母屋は1室で, ついたてにより仕切られている.

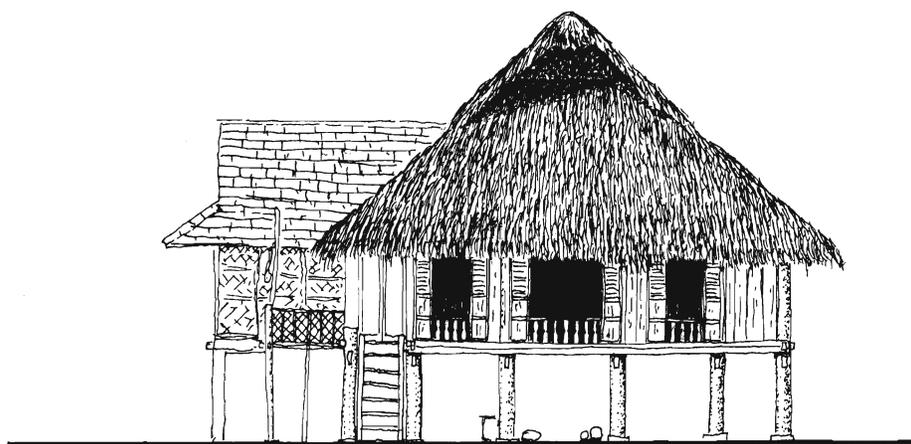


図11. 西側住宅立面図.

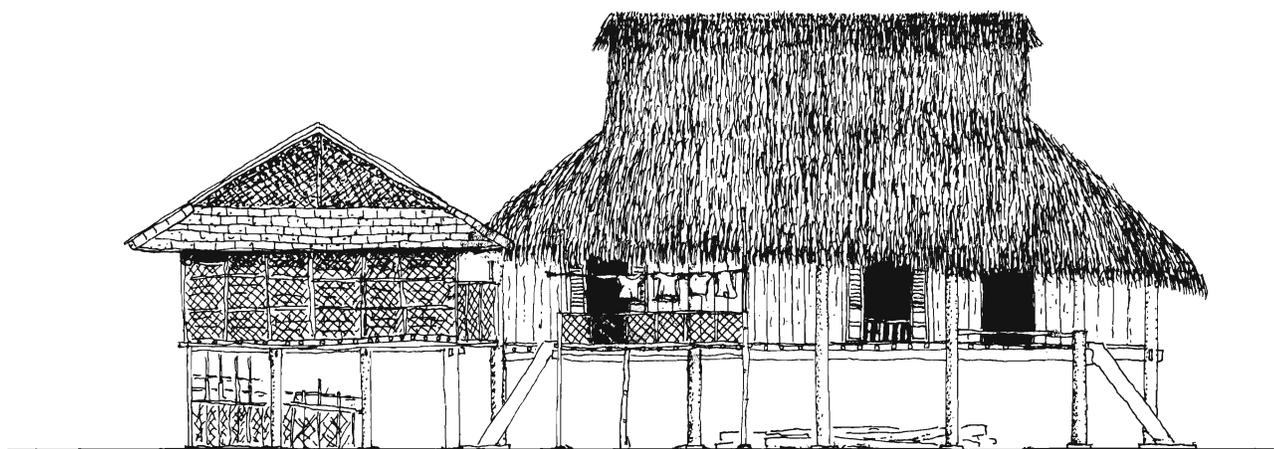


図12. 北側住宅立面図.

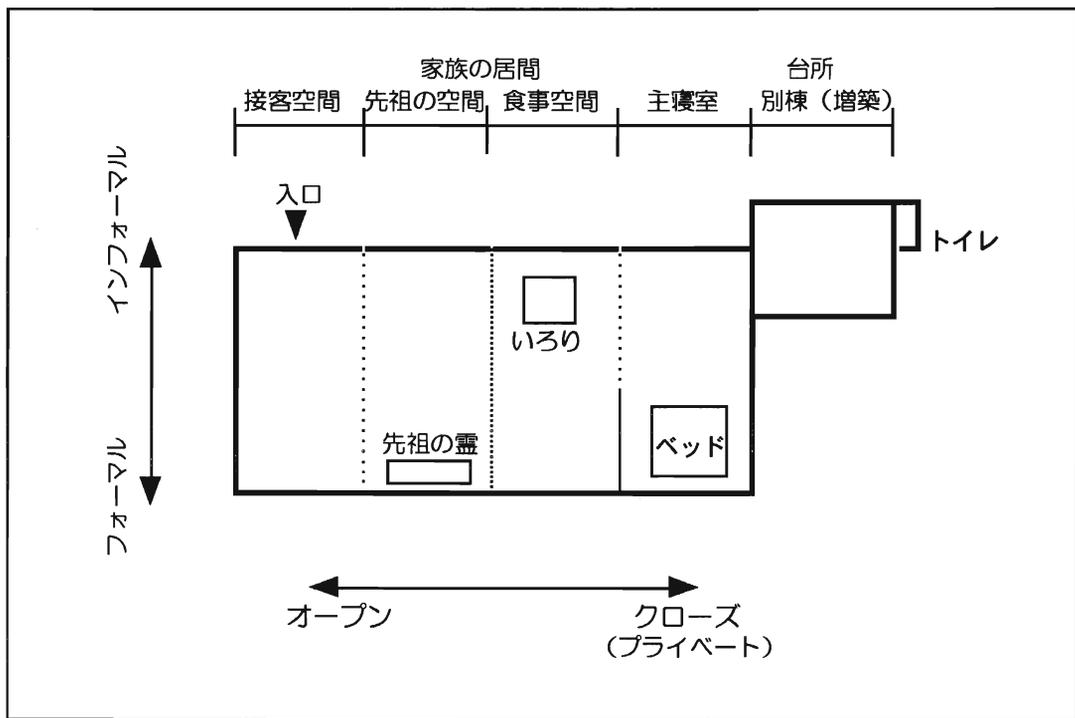


図13. 住居構成模式図.

住居の構成はこのように模式化できる.

### 黒タイの集落・住居

#### 生活と集落の概要

アイ(Ai)村(図14, 図15)は農業協同グループ(生産合作社)の単位で4つのチーム(ドイ: Doi)に別れ, 各ドイはそれぞれ, 17戸, 22戸, 12戸, 22戸の計73戸の世帯で構成され, 10のクラン(氏族: Leo, Lo, Cam, Vivi, Tong, Lu, Quang, Luong, Deo, Vi)からなる. タイ国における黒タイ族は, 10種の姓を使用し, この10種の父系「クラン」はロー・カム(ベトナムではDeo)という権力を持った貴族クランと, その他の平民クランに

分かれるという綾部(1996)の指摘は, アイ村が10種の姓の父系クランを持っていることと合致する. ただし, その呼称についてはタイ国のものとは異なっている. また黒タイ族は, もともと貴族と平民の身分階層が明瞭な社会をつくっており, 各氏族別に食物禁忌をもっていた(Maspero, 1916)ことは, アイ村にもDeoという貴族クランとその他のクランに身分階層があることに符合するものと思われる. この食物禁忌はタイ語系民族には珍しく, その他にも他のタイ語系民族と著しく異なる文化, 社会上の特色は興味深い事象である(綾部, 1971).

アイ村は上記4つのドイの他に, 村域内の空地に非農

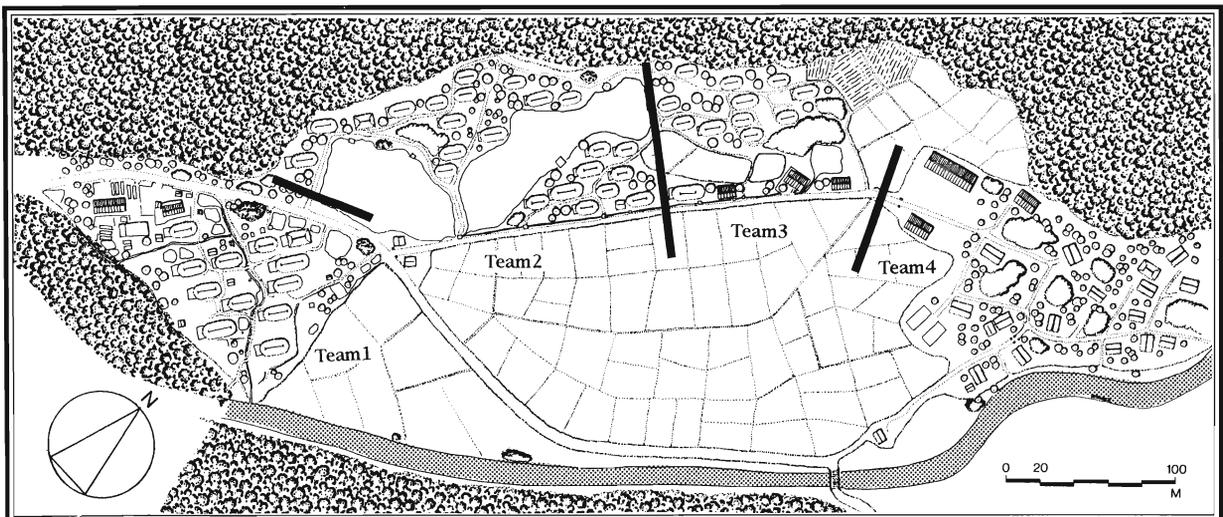


図14. Ai村集落図.

集落は4つに別れ, 道路を中心に並んでいる. 道路には, 集落全体, チームごとの門がある.

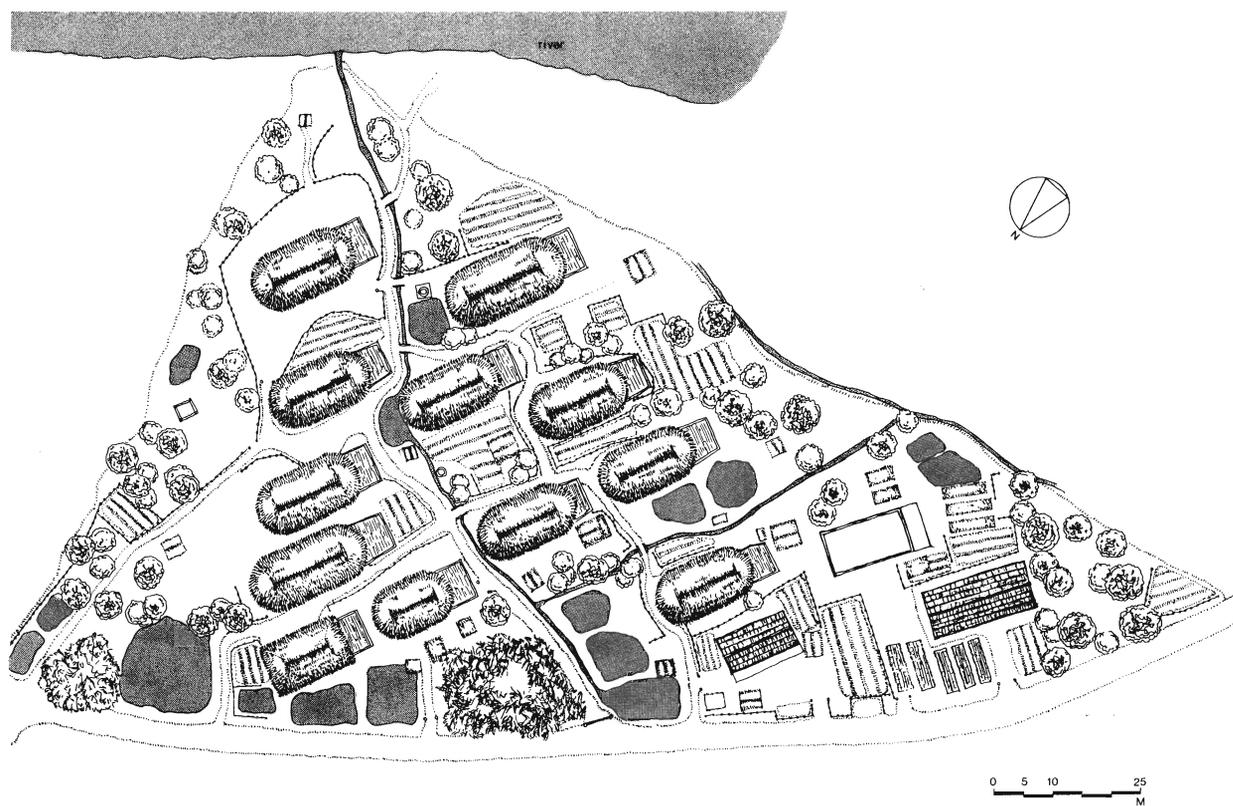


図15. Ai村集落チーム1集落図。

住宅が同一方向を向いていることが分かる。

家の新住民が増えているが、村民としては扱われていない。白タイ族の場合と同様にコンフォン(家内奴隷)に由来するものであろうと思われるが、一時レンガ工場があったことも、新住民の多さに関係していると思われる。

各チームにはチーフがいて、このチーフを経験した人の中から村長が選ばれる。実際には各チーム単位が住民の認識する村であり、生産合作社としては、一つの村であるが、チームが村の機能を有している。

生業は、農業が大半を占めるが、4世帯の煉瓦づくりを職業とするものがある。農業は米の二期作(陰暦の2月に移植し6月に収穫する夏稲と、8月初旬移植、11月収穫の雨期種・秋稲)を行うが、先のマイチャウより1月ほどそれぞれ遅い。その他、山地畑作としてキャッサバ、トウモロコシなどの栽培を行っている。村全体に河川の氾濫などの影響も多く、経済的に豊かではない。そのため違法ではあるが公有林から樹木を切りだし販売することや狩猟で生計を立てている世帯もあった。また補助的に家畜・家禽の売買、生産合作社所有の池で養殖漁業を行っている。

年中行事として、ベトナムの正月に当たるテト(旧暦1月1日)が最大のお祭りである。その他二回の米作の収穫祭が村をあげて盛大に行われる。その他、個人の通過儀礼、子供の誕生、結婚、長寿の祝い(男性70才、90才、女性100才)はチーム単位が中心となって村をあげて行わ

れる。

婚姻関係は、ほとんど村内で結ばれるが、同族近隣集落の者と結婚することもある。

集落には門、墓、池、売店、稲干し場、水車小屋、魚とり場(やななどの仕掛け場)などの共同施設がある。

また、村の入り口・集落の入り口には門があり、この門は外部との結界として村(ムオン：写真16)・集落(ドイ：写真17)・住戸単位(写真18)といったように段階性が見られる。

集落は、山に囲まれた谷筋の道路に沿って線形に並び、20m以上もある川幅の河川が流れている。

集落の中心を通る道路は道幅も広く、この地域の幹線道路となっている。この道路はこの集落で大きく曲がり河をわたるルートをとる。

集落内にめぐらされた水路は、村の共同の池、個人のため池(3世帯に1カ所の割合で、池・井戸をもつ)と河川をつないでいる(写真19)。

伝統的な高床式藁葺き住宅は全戸、同一方向を向いている。キン族の土間式煉瓦造住宅(注9)も同一方向を向いているが、新住民の住宅は同一方向を向いていない。ムラがもつ生活経験から生まれた慣習的社会的規制(ソフト面のみならず、建築形態・集落形態といった具体的なモノまでも)が、土地・氏族と無関係な新住民によって崩壊させられつつあることがわかる。

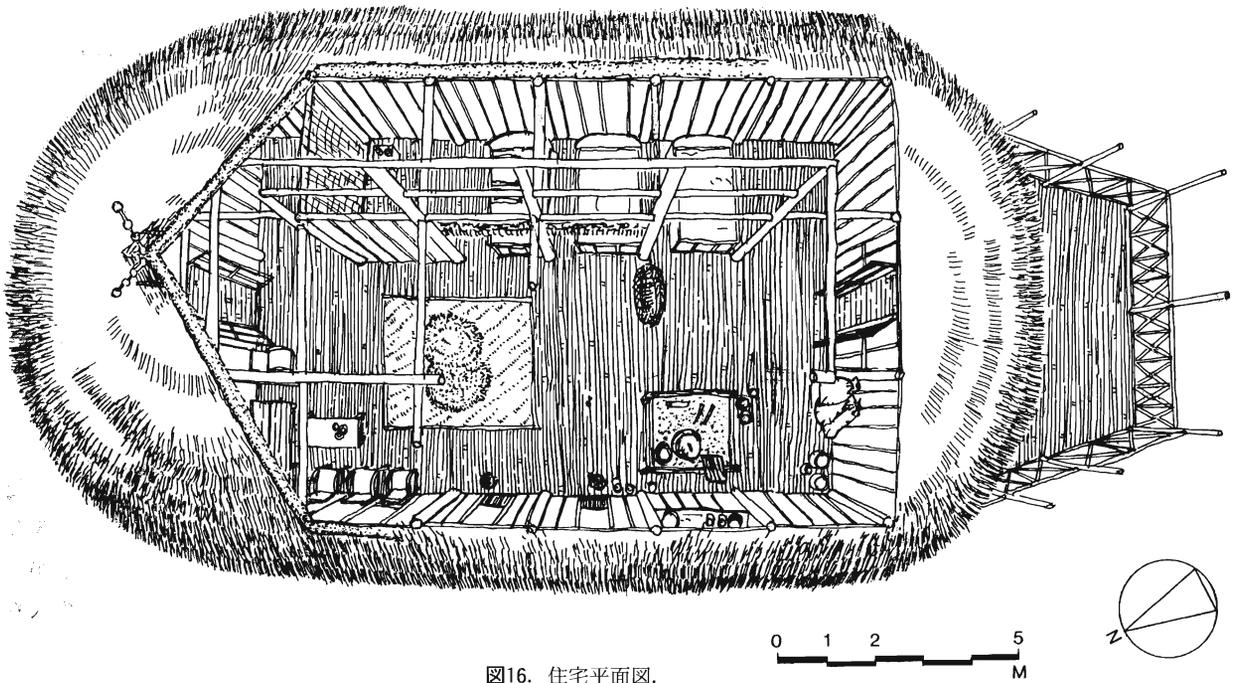


図16. 住宅平面図.

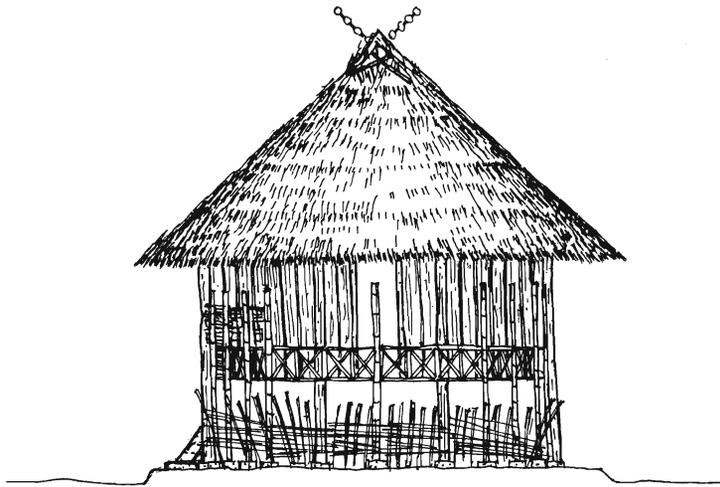


図17. 南側立面図.

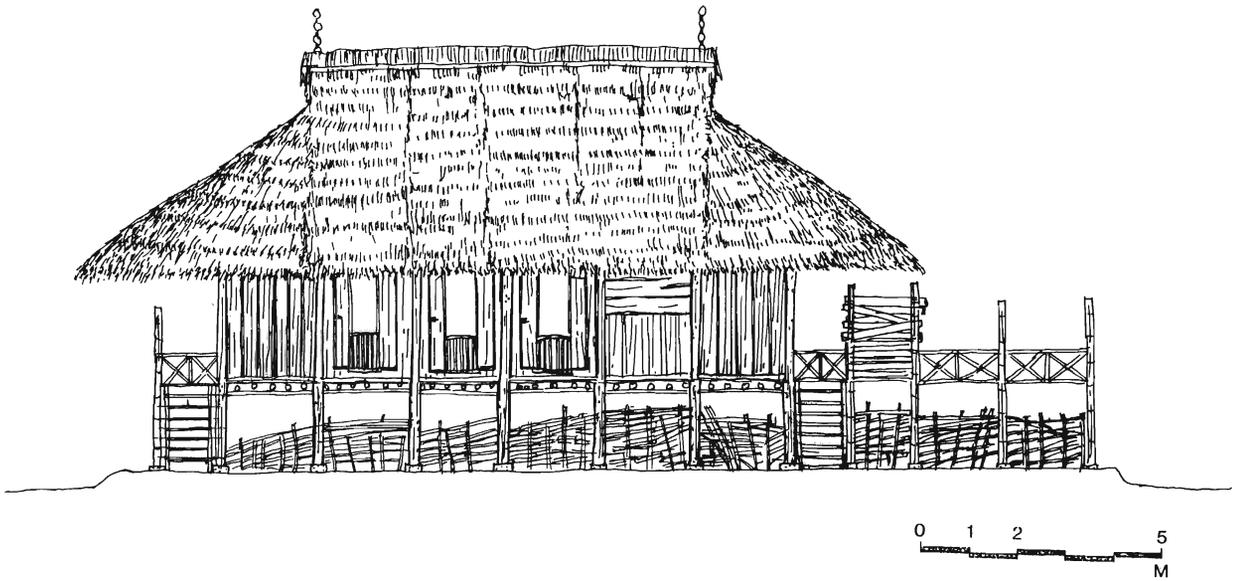


図18. 西側立面図.

住居について

すべての住居の敷地は、竹の生け垣で囲まれている(写真20, 写真21)。これは、家畜・家禽が隣家に入り込めなくするためと、財産管理の目的による。敷地出入口には門がある。

住宅は、住戸毎にデザインの違う棟飾り(千木:写真22)をもつ高床式木造・藁葺き屋根のものが大半を占める(図16, 図17, 図18, 写真23, 写真24)。この集落の高床式住宅はすべて、棟が北から東に20度ふっている。これは、フムットゥム(Hu MoThu Mo, 為すべき事を知り書くことに知悉しているという意。)と呼ばれる占い師が決める。このほか、占い師は住宅のロケーション、建設日などについても、助言する。

住宅には、それぞれ男の入り口・女の入り口と呼ばれる入口が二つある。現在男女が別の入り口を利用することはないが、20年くらい前までは厳格に男女の入り口は使い分けられていた。現在ではテト、結婚式、その他の祝い事の際には必ず男女は入り口を使い分けているにすぎない。現在は、平常時は女の入り口がメインの入り口になっている。

この住宅には平均的に3世代2世帯7~8人住んでいる。室は基本的に大きな1室空間である。男の入り口側に完全に閉鎖された空間は、独身の男性の寝室とされている。このスパンには夜間女性は近寄れない事になっている。夜間ガールフレンドが訪れることが多く、夜間は居住する女性を近づけない措置が講じられてた。その隣のスパンに神(先祖)がまつられ、死者が死後数年、そこで

寝起きしていると信じられている。この神には死んだ日から10日ごとに供物が備えられ、お祈りが行われる。

その隣が幼少の子供の就寝空間は、簡単なついでで、カーテンで仕切った程度のものである。住宅の大小はこの部分のスパンの数で決まる。大きな住宅では2スパンあり、小さなものにはない。その隣は老夫婦の就寝空間である。女の入り口が一番近いところが若夫婦の就寝空間となっている。女の入り口が現在メインの入り口になっている。独身男性が結婚した場合、彼らの夫婦の就寝空間は女の入り口が一番近いところになり、各人の就寝空間は順に移動する(図19, 写真25, 写真26, 写真27, 写真28)。

トイレは住宅内になく(白タイ族の住宅にはあった)、敷地内・集落内にもない。水を使う炊事は、女の入り口側のバルコニー(バルコニーも2つの入り口にあるが、女の入り口の方がかなり大きい。)で行い、火は女の入り口の2スパン目にある囲炉裏で使う。

床下は家畜・家禽小屋、農作業場である。住宅は、ほぼ20年で新築され、10年毎に屋根は吹き替えられる。家の若い男性が、材料を山から切り出し、親戚、村の友人の共同作業で建築される。大工を雇う家も最近が増えてはいるが、大半は自力建設である。

結 論

1959年まで首長制を始めとする伝統的社會關係を維持していたタイ族には、現在でも伝統的生活を垣間みる

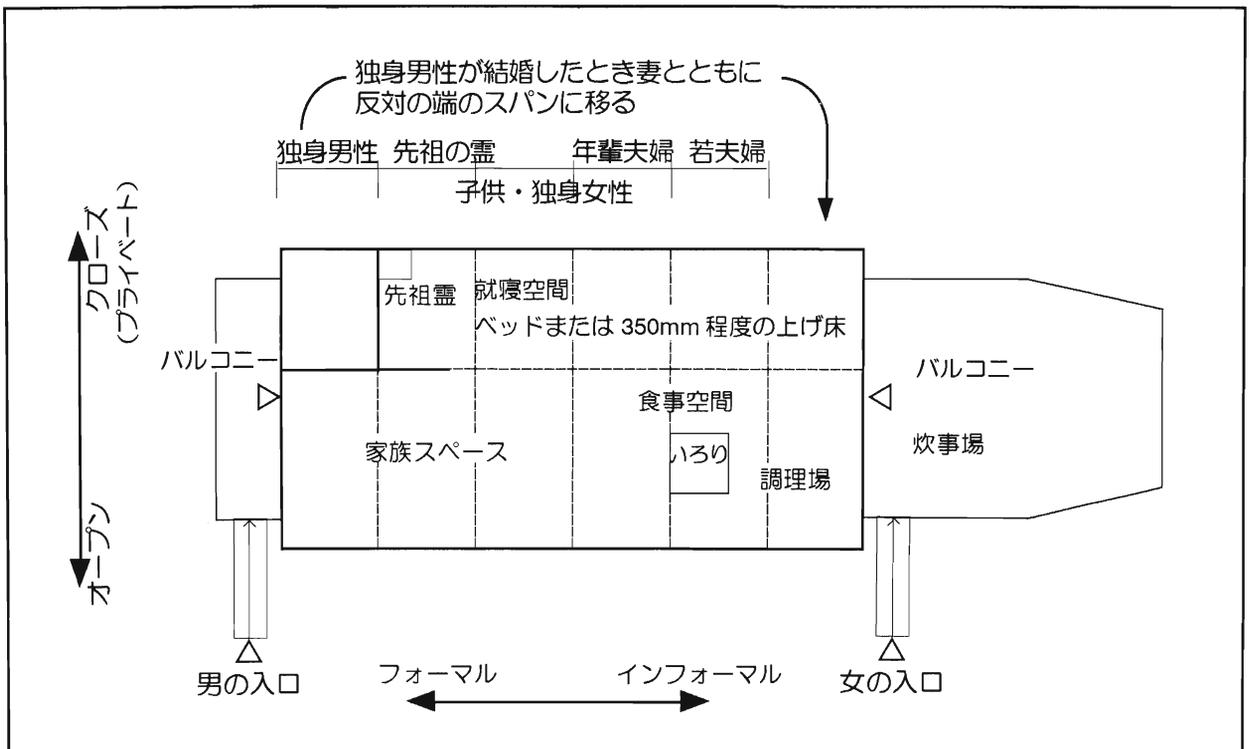


図19. 住居構成模式図.

ことができる。特に彼らの集落・住宅といった物的環境の変化はほとんどないと思われる。本研究で取り上げた、マイチャウの白タイ族、ソナラの黒タイ族の自然・地理条件は、彼ら固有の生活の維持に寄与した大きな要因であると考えられる。しかし、共産主義という社会改革は表面的には以前の社会関係を崩壊させてしまったように見えるが、いくつかの歴史的記述などと現在の社会関係を照らし合わせる作業過程の中で、いくつかの矛盾を生んでいる。すなわち表面上では社会主義政権下においてルール通りに進化したかに見えたものが、内実、現在も古い社会関係を維持したままであることが明らかになったからである。それらは、身分階級が、田地の換地、集落での役割分担などに顕著に現れている。

また、仏教を信じ、姓を持たないとされていた(実際には1930年代には姓を有するようになっていた)タイ語系民族に対し、白タイ族・黒タイ族の場合ともに仏教を信仰せず、先祖崇拝を行っていること、相当以前から姓を有し氏族という概念が強く社会を規制していたことが明らかになった。さらに、白タイ族と黒タイ族の生活には相当の差があり、その差は住宅様式といった目に見えるものにまで及んで、集落・住宅といった物的環境からは同一民族であると考えにくいところもある。

以下、白タイ族と黒タイ族の比較のうえにそれぞれの知見をまとめると、

1. 白タイ族の集落は宅地が短冊状に整備されていることが多いが、黒タイ族の集落には同様の整備を行っているものは少ない。しかし、どちらの住宅もそれぞれの集落で同一方向を向いており、慣習的規制があり、何らかの民族的な深層心理が働いていると考えられる。

2. 白タイ族、黒タイ族ともに、現在は村落運営は民主的に行われていることをアピールするが、実際は首長制の名残とも言うべき身分差が残っている。特に集落内の住宅の敷地に身分階級制が見られる。いずれも集落中心に割合裕福で、村の要職につくものが多く、住宅の規模・造りの良いものが見られる。

3. 白タイ族・黒タイ族の集落ともに、河川の近くに立地し、灌漑設備が完備し、集落内は水路がめぐらされている。集落域は山、河などで明確に仕切られている。特に黒タイ族の集落には門があり境界が明確である。この門は集落の入り口から道の入り口・住宅の門と段階性をもっている。

4. 集落は共同管理の池、河川での漁業、山地畑作など生産合作社の共同事業があり、この共同事業のための施設・設備が集落構成の骨格をなしている。

5. 白タイ族・黒タイ族の住宅はともに昔は垣根により囲まれ、その垣根が階級を表していたが、現在マイチャウの白タイ族の住宅の垣根は住宅の前面(道路側)にはなく、周囲を囲んでいない。黒タイ族の住宅

は垣根をもっている。

6. 住宅は、白タイ族・黒タイ族ともにプランに規則がある。特に男女の寝る場所、先祖の祭祀空間、囲炉裏の位置など一室空間ではあるが格式や決まりがある。この規則性は白タイ族・黒タイ族ともに似ているが、これは、プランが簡単であることと、そこで行われる生活が単純であることから似ているということで、決してこの2つの住宅形式がかよったものではない。とくに、黒タイ族の住宅に、男女の入り口が使い分けられていたり、女性の入れないスパン・空間があるなどオープンな空間に目に見えない境界が明確にあることは、建築的にも興味深い。また、死者の就寝スパンがあり、死後も一緒に住んでいると考えられているなど黒タイ族独特の慣習が住宅プランに色濃く反映されている。

本論文で述べたタイ族に関するモノグラフ的な概要は、今後の調査によって、住宅内の格式や規則性の伝統、住宅の位置・規模・棟飾りなどと身分階級の間接関係を明かにし、その他のタイ語系民族との比較を通して、研究の深化を測りたい。

## 謝 辞

本研究の機会を与えていただいた、ナショナルトラスト(オーストラリア)、ロンドン大学博士課程に留学中のHoang Huu PHEに謝意を表するとともに、この調査に関し多大なご協力をいただいた北村茂章(建築家)、鈴木哲夫(建築家)、中井郁子(通訳・調査補助)、Ha Van NAM(通訳)、井上みやび(翻訳家)の諸氏、および調査中の本務の手助けや研究の進め方等についてのアドバイスをいただいた兵庫県立人と自然の博物館の研究者諸氏、特に池口 仁(兵庫県立人と自然の博物館研究員)氏に感謝いたします。また、調査にご協力いただいたベトナムの方々ここに記して謝意を表します。

## 注

本論文に記載される、ベトナム語・フランス語は印刷の関係から、ローマ字表記してある。ここに記して断っておく。

注1 中尾佐助、上山春平、佐々木高明らにより1960年代後半に展開された「照葉樹林文化論」や鳥越憲三郎らによる「倭族雲南省起源論」など。

注2 本稿でのべる「伝統」とは、「古来から伝えられてきたと考えられる、民族らしい習わし」とする。

注3 18世紀半ばのLe Quy Donの書籍“Dai Viet Thongusu”での指摘などがある。

注4 Hickey はVillage in Vietnam, New Haven, Yale University Press, 1964. でキン族の集落・

住居・生活について研究をし、*Social systems of northern Vietnam*, Chicago, 1958. で北ベトナムの社会組織について論じるなどベトナムについての研究が多く、少数民族の分布・分類についても概括的に研究しており、この分類もかなり正確であると思われる。

注5 吉沢(1982)によると、この3つの類型は以下のようになる。

#### 1. 自然原始生活

人民の一部は依然として遊牧生活様式に従っており、今年はこちら、来年は別の場所へと移動している(トンキンのマン族、メオ族)。

#### 2. 封建的生活

古い部落の痕跡が残っている(ムオン族、ターイ族、カー族)。これらの所では農民の階級分化がまだ不分明で、半部落半封建経済である。

#### 3. すでに資本主義の様式に従い始めているが、しかし封建的痕跡が大部分を占めている(カンボジア・ラオス・ランソン省・カオバン省など)生活。

これらの地域には工業プロレタリアートがすでにいるが、しかしその数はベトナムよりかなり少ない。鉱山労働者・プランテーションのクーリー・運輸業や発電所などの労働者はすでにいる。農業労働者はかなり多く、重要な一部隊を形成している。農村内では階級分化がすでに顕著であり、富農・中農・貧農・雇農(すなわち農業労働者)がいる。

注6 政府の発表による54民族は、HRAFの分類で細区分され別民族とされている民族の区分がされていない(例えばターイ族は1民族として扱われている)。また、民族学の研究者でも意見が分かれるが、100民族以上とする研究者もある。Hoc(1978)の説では、59民族である。

注7 調査はロンドン大学Hoang Huu PHE氏、通訳の中井郁子さんの協力によって行われた。

注8 調査は北村茂章(建築家)、鈴木哲夫(建築家)、守屋智敬(神戸大学大学院)、中井郁子(通訳)、Ha Van NAMの各氏の協力によって行われた。

注9 キン族の住宅は、6m×10~20mの煉瓦もしくはコンクリートの壁(もともとは竹のハンギング・ウォールであったと思われる、現在も北部の僻地や中部・南部の大部分で見られる)に、木造瓦葺き屋根がかかったものである。ほとんどの家屋は内部は一室で、床は張っていない土間となっており、長手方向は3スパンあり、中央のスパンが入り口となっている。入り口の正面に先祖をまつる祭壇が配されている。この土間式住宅はベトナム北部の都市近郊では前記の住宅と別棟の台所がL型に配置された2棟づくりになっており庭とともに塀に囲まれているものが多い。

しかし、ここでは1棟で中庭などをもたない。

キン族の住宅がモン・クメール語族にはめざらしく、土間式住宅であること、北部の都市近郊の住宅とその他の地域の住宅の様式が異なることなどについては別報で述べたい。また、ハノイ近郊の庭を囲んだ2棟建てのキン族住宅の庭の使い方については、Ueda(1996)、上田(1996)をご参照いただきたい。

## 文 献

- Abadie, M.(1924)*Les Races du Haut-Tonkin de Phong-tho a Lang-son*, Paris.
- 綾部恒男(1971)タイ族 その文化と社会, 弘文堂, 東京.
- 綾部恒男(1996)タイ国における黒タイ族の“民族”的位相, 綾部恒男編「国家の中の民族」, 明石書店, 東京.
- Borie, J.(1906)*Le Metayage et la Colonisation Agricole au Tonkin*, Paris.
- Chaliand, G.(1969)*The Peasants of North Vietnam*, Pelican Books, England.
- Dang Nghiem Van *et al.*(1984)*The Ethnic Minorities in Vietnam*, Hanoi.
- Diguët, E.(1908)*Les Montagnards du Tonkin*, Paris.
- Gourou, P.(1936)*Les Paysans du Delta Tonkinoise*, Paris.
- 石川栄吉ほか編(1987)文化人類学事典, 弘文堂, 東京
- Lajoinguere, E.L.(1906)*Ethnographie du Tonkin Septentrional*, Paris.
- Leber, F.M., Hickey, G.C., Musgrave, J.K.(1964)*Ethnic groups of mainland Southeast*, New Haven.
- Maspero, G.(1925)*La Geographie Politique de l'Indochine aux environs de 960A.D.*, L'Ecole Francaise d'Extreme-Orient, Hanoi.
- Maspero, H. (1916)*De quelques interdits en relation avec les noms de familles chez les Tai-Noirs*, Bulletin de l'Ecole Francaise d'Extreme Orient Tome XVI No.3.
- Nguyen Trac Di(1970)*Dong-Bao Cac Sac Toc Thieu-So Viet-Nam*, Saigon(in Vietnamese).
- Ory, P.(1894)*La Commune Annamite au Tonkin*, Paris.
- 桜井由躬雄(1987)ベトナム紅河デルタの開拓史, 渡部忠世編「稲のアジア史第二巻 アジア稲作文化の展開」, 小学館, 東京.
- 上田博之(1994)ベトナムの少数民族集落の研究 #1ターイ族集落の構成について, 日本建築学会大会梗概集E, pp.1321-1322.
- 上田博之(1995 a)ベトナム少数民族の集落と住居に関する研究その1 黒ターイ族の集落と住居の概要, 日本建築学会近畿支部研究報告集第35号・計画系, pp.533-536.
- 上田博之(1995 b)ベトナム少数民族の集落と住居に関する研究その2 白ターイ族の集落と住居の概要, 日本建築学会近畿支部研究報告集第35号・計画系, pp.537-540.
- Ueda, H.(1995)*Study of the Villages and Dwellings of Ethnic Minorities in Vietnam-The Construction and Formation of the Village and Dwellings of the Thai-, Housing Science and its Applications Vol.19 No.4*, pp.265-276, U.S.A.
- Ueda, H.(1996)*Ecology Oriented Agricultural Management and Village Landscape in Northern part of VIETNAM-Report on VAC System-, Nature and Human Activities No.1*, pp.105-112, Japan.

上田博之(1996)VACシステム(エコロジカルな農業生産システム)の概要 ベトナム少数民族の集落と住居に関する研究その3, 日本建築学会近畿支部研究報告集第36号・計画系, pp.701-704.

Vien Dan Toc Hoc(1978)Cac Dan Toc It Nguoi O Viet Nam, Nha xuat ban khoa hoc xa hoi, Ha Noi(in Vietnamese).

吉沢 南(1982 a)タイ族の首長制—マイチャウの「ムオン(村落)規制」の分析—, 月刊アジア・アフリカ研究1982年9月号, 東京.

吉沢 南(1982 b)ベトナム・現代史の中の諸民族, 朝日新聞社, 東京.

(1996年5月30日受付)

(1996年8月2日受理)



写真1. 黒タイ族の人々.

黒タイ族の女性は、「シン」と呼ばれる腰からくるぶしまでの長さのスカートをつけ、びっちりとしたブラウス(銀製のボタンが付いている)頭には「ピュウ」と呼ばれる刺繍された黒い布をまく。男性はほとんどが民族衣装をつけていないが、幅広の黒色のズボンをはきシャツをつけるのが伝統衣装である。白タイ族の女性は同様の「シン」に刺繍入りの帯を巻き白いかぶりものをする。男性は白もしくは派手な青のシャツに幅広の黒または青のズボンをはく。

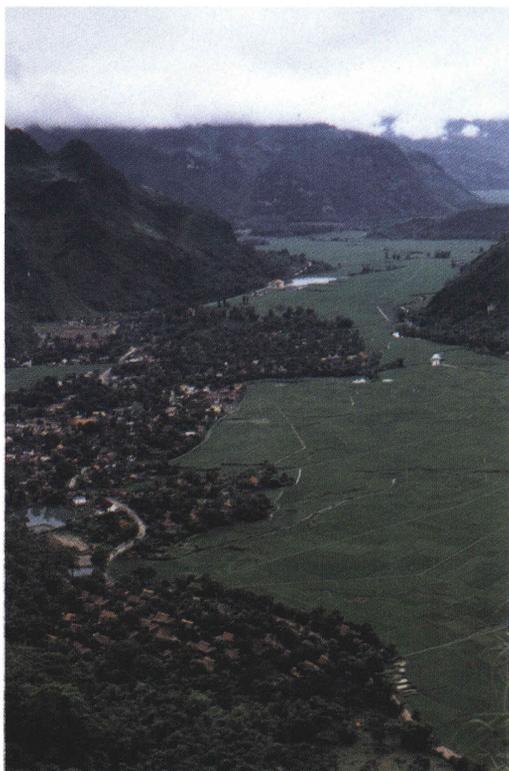


写真2. マイチャウの集落.

白タイ族の住宅がすべて同一方向を向いて並んでいる。水田はみごとに灌漑設備が行きとどいている。桜井由躬雄(1987)によると栽培種はジャポニカ類似種で、この風景を照葉樹林の稲作の典型であるとしている。



写真3. ラック村中心部をみる.

ラック村の中心部。右手に見えるレンガ屋根は共同の作業場と保育園である。



写真4. ラック村集落入り口から集落を見る.



写真5. 田地から集落を見る.



写真6. 集落の主要道路.  
椰子が各家の前に植えられ、同一方向に並ぶ家屋とともに、美しい街路景観をつくっている.



写真7. 住宅外観.  
前面に池、椰子の木が植えられている.



写真8. 旧集落の共同浴場.  
共同便所と間違ひような造りであるが、1mほど下がったところに水がためてあり、男女別の洗い場がある。女性はシャツをつけたまま体をあらう。新住民の共同浴場は上屋がなくかなり貧相である.



写真9. 旧集落の共同井戸.  
旧集落部分には立派な井戸がある.

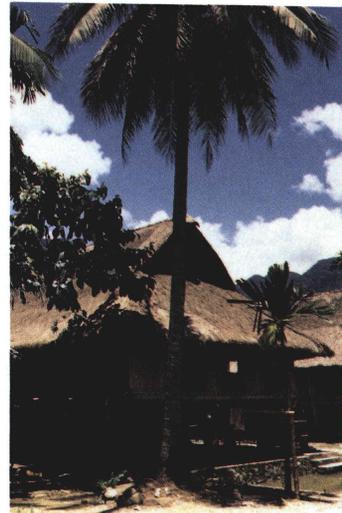


写真10. 住宅外観.  
収穫期には住宅の前面と柵によって囲まれ、コンクリートでつくられた干し場(住宅の側面にある)に米が干される.

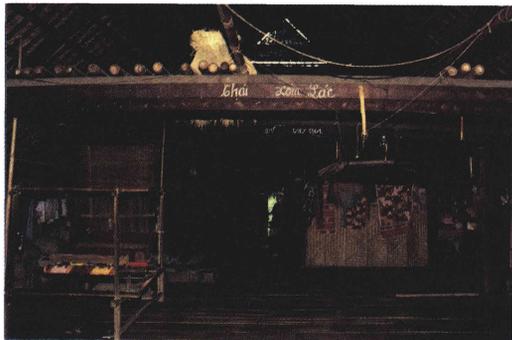


写真11. 住宅内部。  
左手に機織り機，その奥に囲炉裏，右奥についたてが見える。梁にはラック村の表記と建設年がきざされている。



写真12. 住宅内部。  
梁の上に屋根の葺き替え用の藁が見える。女性がきているのが民族衣装である。



写真13. 住宅内部。  
正面に見える家具が、先祖をまつる祭壇である。住宅内には機織り機とこの祭壇以外に取り立てて家具はない。



写真14. 台所。  
台所はもともと、吹きさらしのバルコニーであったと考えられるが、ここでは一応屋根と壁らしきものがある。1年後にはこの住宅は別棟の台所ができています。



写真15. 住宅のモジュール。  
白タイ族の住宅は、建設時の家長の小指の長さを基準としたモジュールをもつ。写真はそのモジュールの尺である。これは竣工後は屋根裏にさざれている。



写真16. アイ村の門。  
黒タイ族の集落は集落境界から段階性をもった門がつくられる。この門は住宅が見えるまで500m以上あるところにつくられており、集落域がわかる。



写真17. ドイ(チーム)の門。  
各ドイの単位毎に門がある。

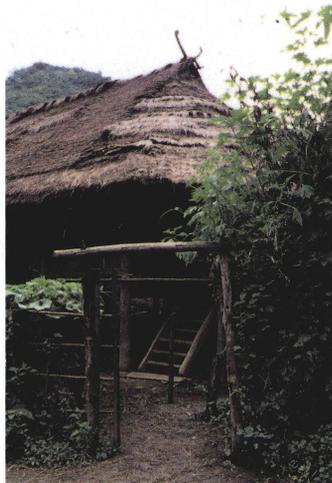


写真18. 住宅の門。  
住宅は垣根によって完全に  
囲まれ、門を持つ、これは  
スライドするようにデザイ  
ンされたものであり、デザ  
インの質も高い。



写真19. 集落内をめぐる水路と井戸。  
この井戸は上水として利用され、概ね3戸ご  
とに1つ共有している。



写真20. 集落内部。  
各住宅の垣根が道路境界にめぐらされている。



写真21. 集落内部。  
住宅と垣根、通路の関係がわかる。



写真23. 住宅外観。  
住宅は同一方向に棟が向いている。屋根の妻側  
は円くなっており亀の甲良のような屋根である。  
また女の入り口も同一方向を向いている。



写真22. 千木。  
黒タイ族の住宅は千木をもつ、デザインが姓と関係があるように思われるが、解明されていない。

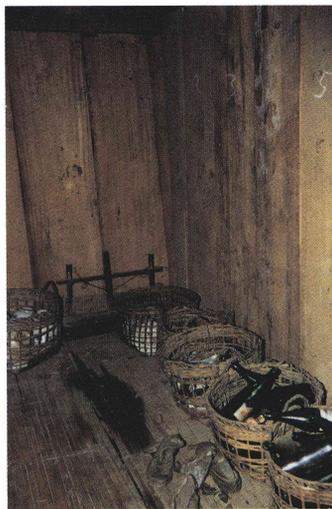


写真27. 死者の就寝空間。  
死者は、家族と同様就寝空間をもち、その場所で眠っていると考えられている。空き瓶の奥の壁の部分の床にまつられている。

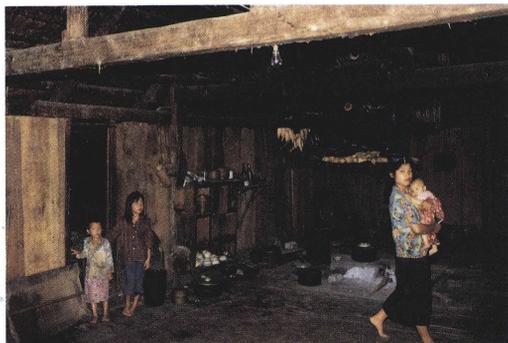


写真25. 住宅内部。  
独身男性の就寝空間は完全に区切られており、厳密には1室空間ではないが、独身男性の就寝空間に天井はないので上部でつながっている。空間は1室として意識されている。

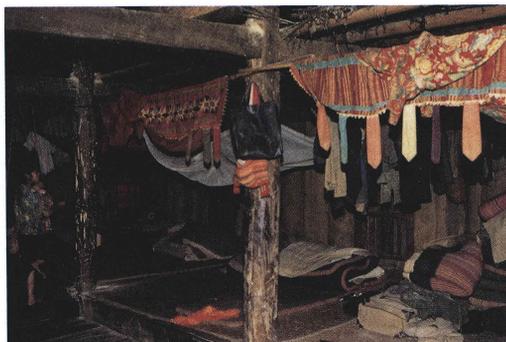


写真26. 就寝空間。  
1室空間であるが、30cm程度の段差があり、空間が分離され、簡単なカーテンで区切られている。



写真28. 独身男性の就寝空間。  
かなり、かっちりと区切られた独身男性の就寝空間には夜間女性は近寄れない。夜間ときどきガールフレンドが遊びに来るとことであり、女性の夜這いとも言えるべき慣習がある。



写真24. 黒タイ族の住宅を描いた切手。  
伝統的な黒タイ族の住宅が切手のデザインとなっている。現在の住宅とほぼ同じ外観で男の入り口、女の入り口がある。